
雨のち、さくら

藍沢 要

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨のち、さくら

【Nコード】

N7221P

【作者名】

藍沢 要

【あらすじ】

喧嘩ばかりしている桜と秀人。なんだかんだで気になっているのに、素直になれない二人。そんな彼らのお話。

編み物BABYスピノフ、唯の義兄^{シスコン}である秀人とバイト先の店長の桜のじれっとしたラブコメ？

【01】驚愕の目覚め Side 桜

誰か、これは夢だと言って。

なんで、あたしの隣でこの男が寝てるの…？

しかも、なんであたし達二人とも裸なの…？

一体なにやったの、あたし達…！！

冷静になれって言っても、なれるわけがない。パニックな頭で隣に寝ている男を見た。

悲しい事にやっぱりあたし達は裸で、おまけにこの男に腕枕までされているという嬉しくないオプシヨン付きなわけで…。

細そうに見えるくせに、付いてるところはしっかり筋肉が付いてる、所謂細マツチヨ。くそ…薄明かりに照らされた鎖骨がエロイ。

長い睫毛が伏せられている。どうやら熟睡しているらしい。寝てても綺麗な顔…。

部屋を見渡してみると、私の部屋じゃないのはわかった。インテリアなどから推測するに、多分ここはこいつのマンションなんだろう。昨日の記憶がない。どうしてここに来たんだっけ…。確かクリスマスだって言うのに、二人で悲しく酒盛りしてた様な…。

そこから悲しいほど記憶が抜け落ちている。あたし…こいつといったしちゃったのか…？

血の気が引いて、その後すぐに頭に血が昇った。

急いで、しかしゆっくりと男の腕の中から抜け出して、ベッドの下に散乱している服を着込んだ。…うわ、こいつの服もあるよ…。忍者さながらの慎重さで、ベッドルームを抜け出して、リビングに飛び込んだ。そこにあつたのは、ぐっちゃぐちゃなお酒の瓶やら、空き缶。嫌な予感がひしひしとしてきて、なるべく音をたてないように散らかったそれらを片付けた。

その後、自分のカバンを持ち、再び忍者で玄関のドアを開けた。良かった、起きなかった…。

玄関脇のネームプレートを見て、ため息をついた。

『H i d e t o . k 』

あたしはそのまま、タクシーを拾ってそのマンションを後にした。失われた記憶に痛む頭を抱えながら。

【01】驚愕の目覚め Side 桜（後書き）

さあ、なにしちゃったんでしょうね。うふふふ。

【02】惨劇のクリスマス Side 秀人（前書き）

改稿っていうか、ほぼ書き直しました。

【02】惨劇のクリスマス Side 秀人

「もう嫌だー！！！！！！！！！！」

誰もいない部屋に自分の声が響く。

今日はクリスマスイヴ。

なのに、僕はなんでこんなに仕事してるんだ！！

予想はしてた。

零が仕事を押し付けて、自分はさっさと妻と生まれたばかりの子供の待つ帰るだろうと。

案の定だ。

だけど、なんだこの量は！！

優に年明け分まであるじゃないか！僕は正月まで仕事漬けなのか！？
イライラして、書類を机に投げつけた。叩きつけられたそれは仕返
しか、バサバサと机の下に落ちた。

「唯もないし…。」

そう、唯は父さんとパリに行ってしまった。

連れて行った父さんの機嫌がものすごく良かったのにも、更に腹がたつ。

美奈は美奈で、彰義と一緒に過ごしてるだろうし。
僕だけ寂しいイヴか…。なんだか虚しくなってきた…。

時計を見ると既に22時を回っている。

デザイン途中の服をぱっと見た。それを少しだけ手直ししてから帰ろうと思って、スパンコールを取り出そうとしたらあいにく在庫が切れている。

「全く…スパンコールも無いのか…。」

あつちもこつちも上手くいかない。

今からじゃ店は開いていないし、仕方ないから帰ろうとしたところ
でふと、桜の店ならあるのではないかと思い出した。

今の時間に店自体は開いてはいないだろうが、在庫があるかどうか
はわかるだろう。

「あ、もしもし。僕だけど。」

『私にはこんな時間に電話してくる僕なんていう知り合いはいません。』

「桜、お前の店にスパンコールあるか？」

『ちよつと無視！？聞きなさいよ！！』

「あるのか、無いのかどつちなんだ。」

『…はあ…。あるわよ。何色？』

「黒だ。」

『黒ね、あるわ。何？あんたんとこの会社にあるでしょ？』

『在庫が切れてるんだ、今からじゃ店も開いてないだろ。そこにお前の存在を思い出したんだよ。ありがたいだろ？』

『ありがたくないわよ!!』

電話口でイライラしている桜が容易に想像できて少し笑った。今もぶちぶち僕に文句を付けている。

『だいたい、あんたクリスマススイヴなのに仕事してるわけ？はっ、寂しいわね。有名人なのに実は寂しい一人モノなんだー。あはは、いいザマ。』

「うるさい！どうせお前だって一人で過ごしてるんだろ！！人の事言えないぞ、桜。」

そう、絶対こいつは一人で過ごしてる。確信と共に言い放った僕の言葉に、ものの見事に桜は詰まった。
やっぱりな。

「ま、お互い人の事言えないか。ところで、今からспанコール必要んだけど、店開けてもらえない？」

『はあ！？今から！？あんた、今何時だと思ってるのよ!!』

「お前のアパートに迎えに行くから着替えて待ってるよ。」

『ちょ…ちよっと待つ』

そのまま電話を切り、予想できた桜の反応に思わず口角が上がった。さあ、あいつをからかいに迎えに行こうか。

「…本当に来たのね…。」

「当たり前だろ、спанコール使うんだから。」

ため息を付いて僕を見ている桜を助手席に乗せて、店まで来ている。

切らしていたスパンコールを見つけて、このまま会社に戻ろうと思っただけ、桜を連れてきている。さて、どうしようか…。

「僕会社に一旦戻るけど、お前も一緒に来い。すぐ終わるから、それから送っていく。」

「あたし、帰りたいんだけど…。」

「ま、こんな時間に呼び出したお詫びに、一杯奢るよ。」

「高い店は嫌だからね。」

断らないのがこいつらしい。食い意地が張ってるというか、素直なのか…。

会社に戻って、服にスパンコールを付けていると、連れてきた桜がじつと僕の手元を見ている。

「なに？」

「いやあ、上手いもんだなあと思って。唯ちゃんも裁縫上手いけど、あんたが教えたの？」

「いや、唯には祥子さんが教えたんだ。父さんと祥子さんが結婚した時から編み棒持ってたからな。あの頃の唯、可愛かったなあ…。今も可愛いけど。」

「はいはい、唯ちゃんは可愛いですよ。よくあんなに可愛いのに、彼氏いないわね。不思議だわあ…。」

桜に言われた言葉にムカついた。唯に彼氏なんて出来た日には、僕は二人の邪魔をしてやる。

思った事がわかったのか、桜は僕の顔を見てくすくすと笑っている。どうせ言われる事なんてわかってる。

「シスコン。」

「うるさい。終わった、帰るぞ。」

「はい、やっと帰れる。つと、その前に一杯の約束は守ってよね。あたし、白ワイン飲みたいんだよね。一応クリスマスだし。」

「クリスマス関係ないだろ、白ワインは。と言っても、この時間じゃ店開いてないか……」

時計を見ると、既に今日一日が終わろうとしている。どうしようか
 と思つて、車を走らせて、考えた末に自分のマンションに連れて行く
 ことにした。

このマンションは、仕事で実家に帰れなくなったり、アイディアを練る際、静かな空間で集中するために借りている。間取りは唯の部屋ほど広くはないが、別に狭いわけではない。それにワインセラーなら部屋にあるし、いいワインも買ってあったはずだ。クリスマスだし、それを空けよう。

「なんであんたの部屋なのよー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「うるさいんだよ、お前はいちいち！」

自分の部屋に連れ込んだ……もとい、連れてきた時に近所迷惑も考えず大声で叫んだ桜を一喝して、リビングにあるソファアームに座らせた。その前にあるテーブルにドンツとワインボトルを置き、グラスを二つ並べる。オープナーを使って、ワインを開けると芳醇な香りがコルクを抜いた瞬間漂う。

それをグラスに注ぎ、桜の目の前に置いた。案の定、桜は目を輝かせてワインを見ている。

「ほら、ゆいね。」

「ありがとー！んー、いい香り。じゃあいただきます。……美味しーい！！いいワインだね、これ。すごく美味しい！」

「だろ？フランス行った時に飲んで、気に入って日本でも探して、ようやく見つけたんだ。有難くいただけよ。」

「はい。フランスって言えば、唯ちゃん、パリに行っちゃったんだって？寂しいわねー、シスコンのあんたとしては。」

にやにやと笑っている桜のグラスにワインを注いでやって、自分のグラスにもワインを満たす。

パリにいる唯の事を知ってるこいつの顔がなんともムカついて、更にグラスを煽った。辛口なのに、飲みやすいこのワインは既に半分無くなっているのに気付いて、冷蔵庫から缶ビールを何本も取り出し、テー

ブルに並べた。

「ああ、唯は父さんとパリにいるよ。知ってるんなら、いちいち言うなよ。」

「だあってー、あんたのそのキツレーな顔が歪むのが面白くてたまんないんだもん。あれ？あたしってS？」

「悪趣味だな。だから彼氏も出来ないんだよ、お前。」

ぐつと詰まった桜は勢いよくグラスを煽った。良い飲みっぷりに関心していると、いつの間にかボトルが一本空いていた。

仕方がないのでセラーからもう一本取り出して飲んでみると、缶ビールを既に何本も空にした桜が意外な事を言い出した。

「ねえ、あたしさあ、そんなに女の魅力無い？だから彼氏出来ても続かないのかなー。」

吹き出すかと思った。

いきなり何を言い出したかと思えば、こいつは…。よくよく見ると、完全に酔っ払ってる。目がすわっている。

「おい、桜、お前飲みすぎだぞ。」

「うるさい！もつと飲むんだー！！そのワインちょーだい、秀人くーん！」

「お前に君付けで呼ばれる事ほど、ム力つくことはないな。って、おい、いい加減飲むなって！！」

「やだー！！ていうか、なんであんなそんな素面なの？ム力つくー！！もつと飲みなさいよお！」

「おいっ！女のくせにボトルから直で飲むな！！」

急いで取り上げたものの、既に飲み干した後だったらしく随分と軽くなったボトルを持って、軽く頂垂れた。桜ってこんなに酒癖悪かったか？

当の桜を見ると、テーブルに突っ伏している。おい、勘弁しろよ…。軽く揺さぶると、のっそりと顔を上げた。…が、顔がヤバイ。なんでか泣きそうな顔をしている。何でだ？

「桜？吐きそうなのか？」

「…うやだ…」

「なに？吐くんだったら、こっちだぞ。」

「違うー！！もう嫌だ、この鈍感男ー！！バカー！！ニブチンー！！シスコンー！！」

「はあ？鈍感男って何だ！喧嘩売ってんのか！？」

いきなり怒り出した桜に、何がなんだかわからないまま怒鳴り返した。

が、次の瞬間目の前でコイツが服を脱ぎ出したのには、頭が真っ白になった。着ていたセーターがぱつと床に落ちた時、ようやく我に返った。キャミソールとスカートだけの姿のままうろつき始めた桜を急いで止めにかかる。

「ちよつ！なんでお前脱いでんだよ！！服着ろ！！」

「もう寝る！！ベッドどこ！？」

「こつち…って、おい！！だから脱ぐなって言ってるんだろ！」

寝室に着くと、もはやこいつの独壇場だった。

キャミを脱ぎ、スカートを腰から落として下着姿になった桜を思わずマジマジと見てしまう。服を着てたらわからなかったが意外にある胸と、くびれのある腰。…不本意ながら、好みの身体をしている桜。そこまで考えて、目を覆った。悲しい男の性にも程がある。

しかも、当の本人は下着まで取り去ってベッドに入った。勘弁してくれ…。

「ちよつと！あんたも早く！」

「…は？」

「あたし抱き枕ないと寝れない！だから早くベッドに入る！」

そう言つてガバツと起きた桜に引きずりこまれたベッドで、更に惨劇が起きた。

桜が僕の服を脱がし始めたのである。

「おい、ちよつとやめろつて！！」

「うるっさいなー！抱き枕は喋らない！これ当たり前！」

「僕は抱き枕じゃな…っておい！触るなって！！だから脱がすな！！！！」

散々な攻防の末、疲れ果てた僕達はいつのまにか寝てしまったよう
で…。でも、不思議と嫌な感じがしなかった。むしろ、久しぶりに
安心して寝ていた様に思える。腕に抱えた温かさがいつの間にか、
心地よかった。

朝起きると、桜はいなかった。ベッド下には桜の手によって脱がさ
れた服が散乱していたけど、リビングに行くとき綺麗に掃除されてい
たし、静寂そのものだった。

今度はあいつと酒飲むのは止めよう…。そう思った。

しかし、腕に残った感触が消える事はなかった。

【02】惨劇のクリスマス Side 秀人（後書き）

後半書き直しました。

気にはなってたんですが、こっちの方がしっくりきましたね。ごめんなさい。

【03】疑問ばかり Side 桜

何も無かった。

何も無かった、何も無かった、何も無かった。

さつきから繰り返し、繰り返し同じ単語を何度となく繰り返して
るのはもう仕方が無いことだと思う。

理由は言わずもななってやつだ。

だいたい、起きた瞬間からおかしい。

疑問？

いつあたしがベッドに入ったのか。

疑問？

何故あたしが真っ裸だったのか。

疑問？

何故あいつが隣で、しかも腕枕（これ重要）をして寝ていたのか。

疑問？

ヤッチマッタノカ。

あたし的に目下の最重要疑問は？なんだけど、他の？の疑問も
かなり気にはなっている。

特に？の辺りが。

「あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
――
――
――
――
――
――
――
――」

思い出せない事に悶絶して、こんな濁点ばかりの溜め息も既に何回目だろう。

今は流石に店の中にはお客さんがいないからいいものの、もし誰かいたら確実に白い目で『この女、あぶねー』とかって思われるんだ。こんちくしょう。

だふー…と店の机に突っ伏して、未だに思い出せない記憶を手探り状態で探る。

うん。

確か、あいつが夜に電話してきてスパンコールがどうのこうのだから、店開けるとかって言ってたような気がする。

うん、そこまではクリア。

んで、会社まで連れて行かれて（自社ビルではないにしろ、何フロア借りてるんだ。フェロモン帝王様）、んでもって服にスパンコールを付けてる所も覚えてる。

初めてあいつが仕事してるの見たけど、悔しいくらい格好良かったのは認める。前から知ってたけど、骨っぽい長い指に目を奪われたのはあたしが指フェチだからって事にしておこう。うん、好みなんだよ、あの指…。

○

おっと、いかんいかん。なんかいけない方向に走りそうだった。危

ない危ない。

でー、一杯奢るとか言われたから白ワインがいいって言ったのも覚えてる。

何故かあいつのマンションに連れていかれて（やっぱりいい部屋だった）、美味しいワイン飲んで、それからビールも空けた…んだろう。リビングに転がってた空き缶と空き瓶を見る限りでは、二人であれだけ飲んだんだろうな。

まあ、あいつはほとんどザルみたいなもんだし、あたしも自分で言うのもなんだけど結構お酒は強い。

でも！！！！

記憶が無いんだよおおおおお！！！！！！！！

ワイン飲んでからの記憶が無い。

ぶつつり途切れてる…！！

イブだって言うのに、本当についてない…。

クリスマスプレゼントが、あいつの裸の無料観賞券だったんだろうか…。

笑えない。

笑えないよ、サンタクロース！

そりゃあさ。

細マツチヨ好きなあたしにとっては、かなり福眼でしたけどね？
腹筋見事なまでに割れてたし？肘から手首にかけての筋肉合がもろ好みだとか、鎖骨がすっげーエロイとか引き締まった腰とか？

…そりゃあ朝だったから元気いっぱいな箇所は見て無いけど。ていうか、見れなかったけど！！存在は如実に感じてました！！ああ、もうごめんなさいよ！！

「あゝあゝあゝ……………」

「うつわ、暗いっすねえ…どうしたんすか？」

「あー…おはよう、たくちゃん。そっか、もう配達的时间？」

「おはようございます。これハンコお願いしますね。」

「はいはい、えーっとこれとこれと…これね。はい、いつもありがとうねー。」

「あざーっす！つか、桜さん、どうしたんすか。さっきから変な声出して。」

毎日の荷物の配達をしてくれる業者の前田拓弥が、すっごい怪訝そうな顔であたしを見てくるので、ははは…と力の無い笑みを返したまあ、たくちゃんとは長い付き合いだ。こんな顔してたら追求してくるに決まってるんだけどさ。

「あ、忘れてた。たくちゃん、メリークリスマスー。」

「うつす！メリクリ！！桜さん昨日どうしたんすか？まさか一人飲み？」

「…あんま聞かないで…」

「うわあ、可哀想に…」

「可哀想ってなによ！！なにさ、たくちゃんだってクリスマスだからって急いで合コンで彼女作ってたくせに！」

「わ、悪いっすか!？」

「悪くないけどさあ……ああ、あたしも彼氏ほしいなあ……」

「…桜さん、なんか切実すぎて泣けてきますよ。今度合コンあったら誘いますから、元気出してください。」

「完全フリーのいい男揃えろ。」

「……………うつす……………」

「じゃあご苦労様でした」と言って帰って行くたくちゃんを見送って、あたしは一息付いた。

彼氏かあ…。

確かにクリスマスを過ごすために彼氏を作る子はいる。あたしの友達だって、そんな子はザラにいるし、それを別にどうのこうの言う必要は無い。

ただ、それがあくまでの繋ぎとしての彼氏だったらあたしは必要ないだけで。

ふと、あいつの顔を思い出した。

一人の女に絶対縛られない男の顔を。

まあ、あいつの場合、繋ぎだろうが遊びだろうが大差ないんだろうし、本気になる女なんか現われる方が奇跡に近いんじゃないだろうか。

それを愛する義妹にまで指摘されてた辺り、最早救い様が無い。

それなのに、なんであたしはあんな男が好きなんだろうなあ…。

またしても変な声が出そうになったもんだから、気を取り直して届いたばかりの荷物の整理を始めることにした。

【04】女子力皆無の自覚無し Side 桜

クリスマス需要も一段落付いた手芸屋っていうものは、実に暇だもんで、お客さんも常連さんしか来なかったりする。

それも常時来店するってわけじゃないから、今はカウンターに一人で座りながら雑誌をペラペラと読んでいる。

既に本番さながらのイヴは終わったとは言え、クリスマス特集が組まれた雑誌は実に華やかだ。

いつも買っている雑誌とは言え、毎年毎年こんなにも特集を組んでたらネタが無くなりそうなものだと思うけど、そこは流石に編集者の腕で毎年違う趣向が凝らされている。

クリスマスファッションから始まり、毎年限定で発売されるクリスマスコフレ。

あ、このコフレ欲しい。でももう予約販売だけで予定数終わっちゃうただろうなあ。早めに予約しておけば良かった…。

色とりどりの限定コフレに見惚れつつ、違うページを捲ると特集アンケートがあった。その中では、彼氏におねだりするプレゼントといざ自分があげるプレゼントの内訳が発表されていて、一位は毎度お馴染みのジュエリーやらブランドバッグだった。

おー、やっぱり彼プレにかける金額は自分が貰う物よりも安っ！まあ、毎年のことだけど現実結構シビアだね。男子連中頑張れよ！あははーんと思いつながら、次の項目を読み進んでいく。

また、そこには『手編みのセーター』が番外編でランクインされて

いて、あたしは内心「嘘だ！」とせせら笑った。

手編みのマフラーならまだしも、手編みのセーターって相手に重いつて思われがちかと思ってたらそうでもないわけー？だって、手編みだよ？既製品だったら買って「はいどうぞ」って渡せるけど、一から編むとなると寸法測らなきゃならないじゃんか！

いや、待てよ？付き合ってる彼氏だったら測らせて貰え……いやいや、そうになったら編むの許可してるって事になるよねえ。って事は、編んで欲しいと思ってるわけ？

うーん……

結局結論は出ないまましていると、お客さんが来店したので雑誌をパタッと閉じた。

その際に裏表紙の靴の広告に出てたモデルを見て、少し挙動不審になったのはお客さんにばれていないはずだ。

桐生美奈。

日本のみならずアジアのモデル業界の頂点に立つ彼女。

九頭身とも十頭身とも言われる完璧ボディに、そのボディに負けな
い華やかな正統派でありながらも魅力的な超美人。

モデル業に専念しているので滅多にTVに出たりはしないけど、出たら出たで全く高飛車で驕ったところがない豪放磊落な性格で更に
人気が上昇。

今や老若男女問わずの絶対的な人気がある人だ。

でも、兄が。

あの義妹命の超ド級のシスコン、桐生秀人。

あ、勿論実妹の美奈も大事にしているらしいけどね。

その人で、ちなみに不本意ながらもあたしが好きな男だったりする。

とは言え、第一印象はお互い最悪。

あいつの可愛い義妹ちゃんとあたしが二人で店で遊んでみると、突然現れたあの男はこう言った。

『おい、その唯に近づいてる男。唯から離れろ。』

この言葉は何年も経った今でも忘れもしない。

当時高校生だったあたしは、部活でソフトボール部だった。そのため、髪はベリーショートだし、屋外競技の為に日焼けで真っ黒、おまけにピッチャーだったから下半身もガツシリしてたわけだ。ピッチャーしてたから、勿論肩もガツチリ。

詰まる所、あいつが付き合ってた女達とは真逆な立ち位置にいたあたしは、あいつの中では男認定されたらしい。

確かに女子高に通ってた当時のあたしは悲しいかな、女子にモテた。そりゃあもう、悲しいくらいに…。

多分それに対する鬱憤も溜まっていたんだと思う。

秀人の言葉を聞いたあたしは当然キレて、義妹ちゃんが見ている前であいつと大喧嘩した。それは迎えに来た祥子さん（義妹ちゃんの母親で、秀人達の義母）が止めるまで続くという、あたし達の中では黒歴史として封印されている。

それから言うもの、なにかとつかかってくる秀人とそれにいちいち反応していたあたしは、完全にお互いの立ち位置がはつきりした。

とは言え、会えば犬猿よろしく喧嘩するあたし達だけど、あたしは必要以上に秀人と関わらないようにしている。

「さて、帰るかー。」

クリスマスだし、もう客は来ないだろうってんで店長判断でいつもより一時間早く店を閉めた。

さて、帰ってご飯作ろうかな。そういや今年ケーキ食べてないな…。ま、どうせ一人寂しくケーキつくつく羽目になるのは目に見えてるんだし、特段気にしない事にしよう。途中スーパー寄って、見切り品の惣菜を二、三点買ってこの前冷凍したカレーでもレンチンして食べよう。そう言えば買いおきのビールあったっけ…。

店を閉める段になってカバンから携帯を取り出そうとしたのだけれど、手ごたえが無かった。

あれ？そう言えば今日携帯見てないな。…アパートかな。朝すっごいバタバタしてたし、充電して忘れてたのかも。

…。

うん、アパート。朝の事なんか思い出したくも無いし。

さ、帰ろ！

なはずなのに…。

「おい、お前携帯、僕のマンションに忘れて行ってたぞ。」

鍵を閉めて振り返いた先には、ナイトメアが存在してました。

ナイトメアはビフォアじゃないの？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7221p/>

雨のち、さくら

2011年12月1日22時48分発行